様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2012～2013
課題番号：２４８２０００９

研究課題名（和文）イバード派イスラーム思想における人間関係論の形成と展開

研究課題名（英文）Study on the Formation and Development of Theory of Human Relationship in the Ibadi Thoughts

研究代表者
近藤　洋平（KONDO, Yohei）

東京大学・総合文化研究科・特任助教

研究者番号：２０６３４１４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　2,300,000円、（間接経費）　690,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、イスラームの一宗派であるイバード派における人間関係論の形成と展開、ならびにその思想の特徴の究明を試みた。作業にあたっては、西暦8世紀から12世紀に活動したオマーンのイバード派の著作を取り上げ、同派における人間関係論の鍵概念である「関わりを持つこと」（ワラーヤ）、「関わりを絶つこと」（バラーア）、そして「判断を停止すること」（ウクーフ）という各概念について考察するとともに、これら諸概念と関係の深い議論である、共同体への入信とコミットメント、信徒による犯罪の問題、そして指導者と臣民との関係についての議論などを分析した。

研究成果の概要（英文）：This study is intended to elucidate the formation and development of theories of human relationship in Ibadi Muslim thoughts and the features of their discussions, with a special analysis on the concepts of association (ar. walaya), disassociation (ar. bara'a) and suspended judgment (ar. wuquf). To achieve this purpose, This study also treats discussions on conversion and commitment to the community, problem of sin in the community, and relationship between leader and people, which were discussed among the Ibadis in Oman, mainly from the eighth century to the twelfth century AD.

研究分野：イスラム学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：思想史　イスラーム　イバード派　神学　法学　人間関係論　宗教学

１．研究開始当初の背景

（１）イバード派は、西暦８世紀前半に成立したイスラームの宗派の一つであり、現在ではアラビア半島のオマーンや北アフリカの一部に信徒を抱えている。同派は、イスラーム初期の思想を引き継ぎつつ、他派との論争や自派内での議論を通じて、現在にいたるまでに詳細かつ体系的な思想を生み出した。思想の形成と展開を通時的に考察することが可能である点、またスンナ派やシーア派というイスラームの二大勢力からの視点とは異なる、新たな角度からのイスラーム思想史を叙述することが可能となる点で、イバード派イスラーム思想の研究は興味深い事例である。

（２）本研究代表者はこれまで、イバード派が有する上記の思想史的特徴に着目し、同派における人間観の究明を試みてきた。イバード派が有した人間観・人間論に関する先行研究は、スンナ派やシーア派といった他派に比べて少ない。また先行研究の成果はオマーンに伝わる作品からも読み取れるかという点、および彼らの共同体の歴史を探るためには必要不可欠な作業である、諸概念の通時的な分析がなされていない点、以上において考察の余地が残されていた。

２．研究の目的

（１）そこで本研究は、人間関係論と深い関係のある、ワラーヤ（関わりを持つこと）、バラーア（関わりを絶つこと）、そしてウクーフ（判断を停止すること）という３つの概念を取り上げ、各概念および関連する概念の分析を通じて、イバード派における人間関係論の形成と展開、および思想の特徴を明らかにすることを目的とした。

（２）本研究は、イバード派の人間関係論を思想史的観点から詳細に考察する点で、独創的な研究である。また人間関係論の理論と実践を、イスラーム法学と神学の観点から取り扱う点で、特色のある、かつ挑戦的な試みでもある。

３．研究の方法

（１）研究にさいしては、クルアーンや預言者ムハンマドの言行をまとめたハディース集とともに、オマーンのイバード派に伝わる各種書簡、法学、神学諸著作を主たる分析対象として利用した。

（２）はじめに、クルアーン、預言者の伝承におけるワラーヤ、バラーアおよび類義語の概念を考察した。次に、当該課題に関係する、ハワーリジュ派およびその分派が有した見解に目を向けた。そして西暦８世紀から１２世紀末までの、バスラおよびオマーンのイバード派の著作を分析した。分析にあたっては、ワラーヤやバラーアなどの言葉の意味分析だけでなく、各概念が語られる、人間関係にかかわる様々な議論を取り上げ、イバード派における人間関係論を総合的に究明することを試みた。すなわち課題究明のため、イバード派への入信とコミットメントに関する議論、罪に関する議論、イバード派の他宗教・他宗派理解、そしてイバード派における指導者と臣民の関係などについて考察した。

４．研究成果

（１）人間関係論の鍵概念であるワラーヤとバラーアについて、その骨子は以下の通りである。

①本研究は、西暦７世紀からすでに、イスラーム共同体内でワラーヤを認める、認めないという活動が行われていたこと、また後代のイバード派の学者たちも当時の状況をそのように理解していたことを明らかにした。そしてすでに西暦８世紀のプロト・イバード派の間では、人間の状態を定める原理としてワ

ラーヤ、バラーア、ウクーフの概念が採用され、そこから様々な規則を導き出していたこと、そしてこれはオマーンのイバード派にも受け継がれたことを明らかにした。
②イバード派は、できる限り多くの人間を、ワラーヤとバラーアの二元論的世界に位置づけようとしており、本研究では、ウクーフはこの二元論的世界を支えるものとして利用されていたことを明らかにした。また本研究は、同派においてワラーヤは、構成員間の集団的、集合的な性質をもつものであるとともに、信仰を通じた神と１人との人間の間にある、肯定的で個別的な関係を示すものであることを確認した。
③またあわせて本研究では、前近代のイバード派の宗教的人間観が、自らの宗教集団を唯一の正当な宗教だとする見方である、宗教的個別主義に基づいた排他的性格を有しているものであることを明らかにした。

（２）イバード派における入信とコミットメントの議論について、西暦９世紀には入信についての問題が、様々な場合分けとともに詳細に取り上げられていることを明らかにした。そしてイバード派の学者たちは、構成員に対して、自派とともに他宗派も、という二重の忠誠を容認せず、他のイバード派構成員に対する相互扶助を進めることで、イバード派内の人間関係が肯定的に強化される仕組みを整えていたことを明らかにした。

（３）上記（２）に関連して、本研究では、イバード派の学者たちが構成員の規範を維持することに関心を払っていたことを確認し、彼らが、罪に代表される、共同体内で生じた逸脱に対して、厳しい態度を表明していたことを明らかにした。その一方で、共同体からの追放を意味するバラーアの宣告の手続きは慎重にすすめられ、また学者たちは、真にそれが必要であるとする場合以外にはバラーアの宣告を好まなかったこと、そしてたとえその場合であっても、相手が悔悟していることが明白である場合にはバラーアの宣告はせず、代わりに悔悟を求めることなどを通じて、バラーアの宣告をできるだけ回避しようとしていたことを明らかにした。

（４）このほか、本研究では、イバード派における人間関係論を、階層の形成そしてイマーム論の議論から読み解いた。そして以下の２点を明らかにした。
①イバード派の学者たちは、信徒たちの間には、明確な区別や序列があると理解しており、特に知識に基づく個人差を、共同体内の階層形成の根拠としていた。
②共同体の指導者であるイマームには、単に臣民に命令を下すだけではなく、臣民がその命令を果たすように、様々に働きかけることが求められており、またイマームは臣民を保護する存在としても理解されていた。反対に、臣民は、イマームのイマーム位を認め、イマームの政治を支えることがその第一に挙げられていた。

（５）本研究を通して得た以上の諸成果のうち、イバード派におけるワラーヤとバラーア、そしてウクーフの概念については、英文によってその成果を記述した。またイバード派における罪とメンバーシップの問題に関する成果は、研究代表者が所属する東京大学中東地域研究センターの論集に投稿した。これらは、２０１４年中に公表される予定である。このほか、改宗とコミットメントについて、英文にて学術論文誌に投稿した。

（６）このほか本研究を通して得た成果を他地域・多分野の研究者に対しても積極的に発信し、意見交換および情報の共有をはかるべく、研究代表者は期間中に複数回の口頭発表を行った。そして参加者との議論を通じて、

イスラーム世界におけるイバード派思想の特殊性と普遍性を捉えるための見通しを得た。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　０件）

〔学会発表〕（計　６件）
Yohei KONDO, The Deposition of al-Imām al-Ṣalt b. Mālik and the Ibāḍī Imamate Tradition of Oman. International Conference on Ibadi History, 17th June 2014, The University of Cambridge, UK.

近藤洋平「東方イバード派における罪概念の展開」2013 年度東京大学中東地域研究センター・中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」, 東京大学, 2013 年 11 月 2 日.

Yohei KONDO, The Development of Ibāḍī Jurisprudence in Oman in the Third/Ninth and Fourth/Tenth Centuries: A Preliminary Study of Some Marriage Issues. International Conference on Ibadi Jurisprudence, 28th May, 2013, Jagiellonian University, Krakow, Poland.

Yohei KONDO, The Theory and Practice of Conversion and Commitment in the Ibādī Community. 東文研シンポジウム「New Approaches to Islamic History, Theory and Practice: Graduate Workshop with Professor Michael A. Cook」東京大学東洋文化研究所, 2013 年 5 月 22 日.

近藤洋平「イバード派イスラーム思想における入信、コミットメントの議論」日本中東学会第 29 回年次大会, 大阪大学, 2013 年 5 月 12 日.

近藤洋平「共同体の紐帯―イバード派イスラム思想におけるワラーヤの概念―」, 日本宗教学会第 71 回学術大会, 皇學館大学, 2012 年 9 月 9 日.

〔図書〕（計　２件）
Yohei KONDO, The Concepts of *walāya*, *barā'a*, and *wuqūf* among 2nd/8th-3rd/9th Centuries Ibāḍīs. in: E. Francesca (ed.), *Ibadi Theology: Rereading Sources and Scholarly Works,* Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 2014 .（印刷中）

近藤洋平「イバード派イスラーム思想における罪の問題」近藤洋平（編）『中東の思想と社会を読み解く』東京: 東京大学中東地域研究センター, 2014. （印刷中）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
近藤洋平（KONDO, Yohei）
東京大学・大学院総合文化研究科・特任助教
研究者番号：20634140

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：

（了）